

# 家庭教育支援協会

会報誌 10 号

## 日本家庭教育学会第 31 回大会報告

家庭教育支援協会理事長

二川早苗

この日の日本家庭教育学会第 31 回大会は、目まぐるしくお天気が変わる一日だったにもかかわらず、例年通り、朝から大勢の学会員で、会場は埋め尽くされた。年々、規模と質が向上している日本家庭教育学会は、31 年前、故・高橋進会長が目指した理論と実践を両輪に、今日まで歩みを進めてきた。その理念を受け継いだ様々な発表が、午前中いっぱい各会場で続いていた。

午後は、「グローバル時代の家庭教育」と題した講演会だった。とにかくスケールがすごいのだ。講演者の渥美育子氏は、長年アメリカで、世界企業を相手に人材育成を手掛けた人物だ。ドメスティック志向の危機



に目が向きがちな家庭教育にたいして、グローバルな危機の脅威こそ、子どもたちに伝えるべきだという。世界の枠組みを理解し、倫理観に基づくグローバルな発想で大きな器をつくるのが親の基本姿勢だという。世界は、インターナショナルからグローバル時代変わったのだ。ちなみに渥美氏によれば、我々が目指すのは、グローバルリストではなくグローバル人材だそうだ。このあたりの思考回路もすっきり説明してくれた。'80 年代に世界を席捲した国際化時代は国家間同士の関わりが主流だったが、'90 年代に入り次第にグローバル時代に移行していった。ところが日本は、バブルが崩壊し失われた 20 年に苦しんでおり、21 世紀になり、本格的なグローバル時代が到来したときには、日本は完全に出遅れていた。グローバル時代ではそれまでと異なり、地球まるごと、世界全体から俯瞰して自分の立ち位置を見つけなくてはならない。そのような地球規模に意識を拡大させるため、渥美氏は「文化の世界地図」をつくり、たった 4 つの枠組みで世界の価値体系を説明してみせた。異なる価値観をもつ人々とつきあっていくには、日本固有の価値観と世界の多様性を受容するベストミックスのバランスが問われることになる。それはトレードオフの関係ではなく、50/50 の関係だ。つまり、グローバル教育とは日本の価値観をもちつつ世界とつながっていけるグローバル人材を育成することにある。これが、グローバル時代の家庭教育なのだ。

まさに目からうろこの家庭教育に、講演後のパネルディスカッションでも白熱した質疑応答が展開された。頭も心もいっぱいの長い長い夏の日が終わった。

2016年 5月 14日 倫理研究所内(水道橋)で家庭教育支援協会の総会及び第1回研修会を行いましたのでご報告申し上げます。

### 「家庭教育を振り返る」

家庭教育支援協会理事 ペンネーム えみこ

5月14日(土)、平成28年度総会及び第1回研究会を執り行いました。近隣だけでなく遠方からも参加いただき、また当日来場いただけない皆さまにも、総会の委任状を返送いただき、お礼申し上げます。

研修会では、中田雅敏先生に「家庭教育を振り返る」と題して講演いただきました。家庭教育支援協会が発足して6年。協会の現状を振り返りながら、主に講師の育成、講演料、ボランティアで果たしてやれるのか、等の現実的なお話を、先生の公私の経験を交えて助言いただきました。また、文科省が推進する家庭教育支援チームへの協会の参加を勧められ、参加者からも活発な意見が飛び交う会となりました。

家庭教育支援協会は発足して丸6年、しかしまだ7年目の未熟なチームでもあります。会員の皆さまにどのように参加していただけるか、届けていけるか、理事会や研修会を通してこれからも模索していきます。

参照 URL: 文部科学省 地域で活躍する「家庭教育支援チーム」

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/katei/1292713.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/katei/1292713.htm)

## 活動報告② 家庭教育支援協会第二回会員研修会

2017年 1月 14日

2017年 1月 14日、倫理研究所内(紀尾井町)で第二回目となる会員研修を行いました。当協会の顧問でもある平良 直先生によるレクチャーと参加者とシェアリングしながら、有意義な研修会となりました。なお、詳細は別紙及びHPにアップしております。

### 「家庭における『宗教』の教育」

家庭教育支援協会理事 松本美佳



第二回 会員研修会は、宗教学者でもある当協会の平良 直先生のレクチャーで「家庭における『宗教』の教育」と題し、参加者と意見交換しながら行われました。

「宗教」とは、総称的概念であり、家庭教育と結びつけるにはとても困難であるということ、そして公教育としての宗教教育の現在と、家庭教育の中での必要性などわかりやすい丁寧なレクチャーに、参加者は、深い興味と、今後の家庭教育の役割を考える

機会になりました。

今回は、インターネット回線を利用し、無料通話サービスのスカイプを利用し、遠方の方でもスカイプを利用して、受講できる試みをしました。意見交換もスムーズに行うことができました。研修会の内容の一部は、別紙をご覧ください。また、HPにアップしております。

2017年2月4日 倫理研究所内において家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会及び、倫理研究所専門研究員の松本亜紀氏による講演が開催されましたのでご報告申し上げます

### 「親子の絆とコミュニケーション～おむつなし育児～」

家庭教育支援協会理事 攝待 逸子

さる2月4日(土)、倫理研究所に於いて上記交流会が開催されました。支援協会からは二川理事長をはじめ7名の会員が参加しました。

開会の挨拶後、倫理研究所専門研究員の松本亜紀氏による「親子の絆とコミュニケーション～「おむつなし育児」を通じて子育ての「錯覚」を考える～」と題して講演が行われました。「おむつなし育児」、何それ？と会場にいた誰しもが思ったのではないのでしょうか。

「おむつなし育児」といっても全くおむつを使わないのではなく、「なるべくおむつを使わない」育児のことで。排泄のサインに気づいたらできるだけおむつを外して、子どもの体を支えたり、おまるやトイレに座らせ

たりして、おむつの外で排泄させるやり方。現代の子どもは、紙おむつの普及でおむつはずれが昔に比べて遅くなっていると言われていて、アメリカでは小学生用のおむつが売っているという話には驚きました。

40組の親子を対象に研究を実施。排泄のタイミングやサインを読み取ろう、感じ取ろう、と子どもに気持ちを寄せること。それは排泄以外の子どもの欲求も理解できるようになり、それによって親が子育てに自信を持ったり、子育てを楽しめるようになるという結果が得られたということでした。なるほど・・・がたくさん講演でした。

興味のある方は、「おむつなし育児研究所」で検索を。書籍等紹介しています。

後半は、2名の家庭教育アドバイザー、家庭教育師の方に活動報告をしていただきました。

最後に全員で和やかに記念撮影をし、閉会となりました。

今回は、富山、京都、岩手から参加がありました。毎年2月に開催される交流会ですが、会員同士なかなか会う機会がありませんので、是非参加していただきたいと思っております。



## 活動報告④ 会員の活動 1

### 「親育ち・子育て ～思春期とどう向き合うか～」

家庭教育アドバイザー 石井登

京都府長岡京市女性交流支援センターの依頼により、昨年9月に2回にわたり「子育て支援講座」を実施しました。対象は13歳以上とし、親子参加も可。1回目のテーマは「①家庭教育の役割と親の自覚」、2回目

のテーマは、「②自律スキルを高める親の姿勢」で行いました。

中高生や家族での参加を期待しましたが、結果としては30歳代～70歳の女性のみでの参加となりました。意図は、②で家庭教育を“家族“の問題として関連づけて進めようと思っていたからです。



①は講演と質疑応答形式、②では、当日に、今抱えている問題を文章(無記名)で提出してもらい、皆で意見を出し合いながら進める形式で行いました。

一つひとつの問題についてみんなで話し合ううち、参加者の意見には共通した感情があることに気がきます。『不安』です。親が持つ漠然とした『不安』を背景に子どもに様々なことを強いる。つまり、従わせることで親が安心を得ようとしているのではないだろうか。子どもの依存先を親が決めて、子どもに与えることで親が安心を得る、親の安心を得るための行為ではないのか……。みんなの話

は修練されていきます。このように②では活発な話し合いができ、濃い時間が持てました。最後に「“思春期”という時期の持つ意味を知り、親がどのような姿勢で子どもに対峙すべきかを学ぶ機会となりました」との意見をいただき、この活動の必要性を改めて実感しました。

## 活動報告⑤ 会員の活動 2

日本家庭教育学会で定期的に行われている家庭教育構想委員会の中で、当理事長が発表されましたので、こちらでご報告申し上げます。

Abstract

### ポストドメスティックの思考実験

#### —レアード、マーティン、ノディングズ—

家庭教育支援協会理事長 二川早苗

本稿では、学校の相補的役割と捉えられることのある家庭教育について、学校教育の対概念としてではなく、家庭とは何かという問題意識のもと、新たな関係性を考察するとともに、個人の人格形成に深くかかわる家庭教育の在り方について、三人の論者の思考実験を参考に論じるものである。ポストドメスティックの思考実験は、多様な人々で構成された大きな家族がたくさんの子どもたちを育てる場所として「家庭の道徳的等価物(moral equivalent of home)」と学校を位置づけることで構想した。

近代以降の家庭教育と学校教育の関係は、それぞれ固有の機能を持ち、互いに補い合う、あるいは、学校教育の補完的な役割を家庭教育が担うという関係にあった。他方で、社会全体が経済成長を必死で追い求める中、静かな危機が訪れていた。それは「家庭の空白」という形で現前し、家庭のもつ教育的機能や役割が失われていく過程であった。こういった時代背景にあって家庭教育に危機感を募らせたのがマーティンとノディングズだった。

本稿では、家庭教育の哲学的考察を促したレアードの提言を受け、学校をもう一つの家庭教育の空間と措定することで、家庭教育の本質を浮き彫りにしたものである。